『天から下ってきたパン①』（ヨハネの福音書 6 章 32-41 節）2020.10.4.

＜はじめに＞ 前日にイエスの奇跡によってパンを食べて満足した群衆は、「あの奇跡をもう一度、願わくばいつも、いつまでも」と願ってイエスを捜し出して求めています(34)。しかしイエスは、パンの奇跡から彼らに伝えたい真意がありました。「わたしがいのちのパンです」(35)こそ、それです。

Ⅰ　イエスが語るパン(32-36)

①天からのまことのパン(32-33)

モーセが与えたマナは天来のものでしたが、後に来るまことのパンの予表・影に過ぎません。神は世にいのちを与えるために、天からパンを下されるのです。いのちと直結するパンを引き合いして、イエスは目に見えない霊的真理へと話を進められています。

②わたしがいのちのパン(35)

35 節で真理が開陳されます。イエスご自身こそ、父なる神が世にいのちを与えるために天から下された方です。「わたしは…」は本書で 17 回出て来る特徴的な表現です。「来る」「信じる」は主イエスと私たち人間の関係を表し、観念ではなく行動に表れます。

③先の奇跡の意味(34,36)

奇跡もたとえ話も、卑近な事物から始めて天的・霊的真理へと導く踏み台に過ぎません。そこで展開される出来事・物語が如何に良く願わしくとも、それに固執してはなりません。しかし群衆は腹を満たす「パン」を求め続け(34)、与え主と真理に目を向けません(36)。

Ⅱ　イエスが指し示すもの（35-40）

①「いのち」とは(35)

パンはいのちを支えるものです。イエスはご自身がいのちを与えるものと紹介されました。いのちとは何でしょうか。私たちが思い描くいのちと、主が語られるいのちは同じでしょうか。「終わりの日によみがえらせる」(39,40)という表現からいのちの特徴を見出してください。

②「わたしを遣わされた方」とは(38-39)

その方をイエスは「わたしの父」と呼びます(32,40)。「父」は神を指す別称です。ならば、イエスは何者なのでしょうか。イエスは、派遣者から使命完遂のためにこの世に遣わされました(38)。イエスを信じるとは、遣わした方と遣わされた方の意図・心を受け取ることです。

③「みこころ」とは（39-40）

イエスに触れ、その御業と教えを見聞きして、この方こそ父なる神が遣わされた者・神の御子であると信じる者すべてに、神は永遠のいのちを与えられると約束されます。そのいのちは終わりの日によみがえることで明らかに表れます。信じる者はイエスのもとに来ます。

Ⅲ　群衆が求めるもの

①信じるきっかけ～求めること(34)

三度イエスが「パンを与える」(32-33)と言われたことに、群衆は色めき立ち、イエスにそのパンを求めます(34)。現在的・現世的・物質的な求めから始まって、永遠的・永続的・霊的な事柄に目が開かれて行くことは十分あり得ます。そのために主はしるしを行われます。

②信仰の飛躍～しるしの奥にあるもの(35)

群衆が求めるパンからパンに込められた真理へと、イエスは一気に進まれます。神は「目を高く上げて、見よ」(イザヤ 40:26)と、視座・視点の飛躍を促されます。神が見せようとされる世界へとなだらかなスロープを上るのではなく、高低差を一気に飛び越えるのです。

③イエスが与えるものを求める(37)

前段落では、イエスと群衆はかみ合わない対話でも共に進んで来ました。しかし、ここに至って両者の目指す方向性の違いが明確になります。このような時、私たちはどうするでしょうか。イエスを信じる者とは「わたしのもとに来る者」です(35,37)。

＜おわりに＞ 自分の求めるもの・目指す方向へと突っ走ろうとし、その実現のために主イエスさえも利用しようはしていないでしょうか。イエスを信じるとは、主が与えてくださるものが最善であり、いつでも主が指し示される方向に軌道修正する柔らかさです。それを持ってますか(H.M.)